
.hack//シンフォニア

面目躍如

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / シンフォニア

【Nコード】

N7441B

【作者名】

面目躍如

【あらすじ】

シンフォニアの世界にhack / G・Uを混ぜた話です。嫌いなら見ないほうをお薦めします。あくまでファンフィクションです。

説明（前書き）

シンフォニアと・hack／G・U・製作者の方々申し訳ありません。ファンフィクション書かせていただきます。

説明

シンフォニア 登場人物

ロイド・アーヴィング

性別 男性

二刀流剣士

本人曰く

「二刀に増やせば二倍の強さになる」と思い込んでいる。
熱血感がたまに傷。十七歳。

コレット・ブルーネル

性別 女性

チャクラム使い

天然でドジであるが神子としての風格をたまに表す。基本は穏やかで優しい。十六歳。

3

ジーニアス・セイジ

性別 男性

魔法使い

背が小さく。年齢は十二という子供だが天才児である。ロイドやコレットとは仲良し。

リフィル・セイジ

性別 女性

魔法使い（主に回復）

ジーニアスの姉で皆の先生。イセリアに住んでいる。慕われる存在で頭も良い。

クラトス・アウリオン

性別 男性

魔法剣士
傭兵で謎が多い。

・hack//G・U・登場人物
ハセヲ

性別 男性
マルチウエボン
錬装士トライエッジにより、すべてを初期化された。この世界に移動してしまったプレイヤー！。ゲームのハセヲに魂が移ってしまったかのような現象にまだ戸惑っている。元の世界に戻りたい。存在理由は【復讐】。

志乃
性別 女性

ハセヲの存在理由そのもの。トライエッジにより、プレイヤーキルされ、リアルでも意識不明。

オーヴアン
性別 男性

ハセヲの師匠のような存在。ハカ月前から行方不明。ミステリアスな性格をし、すべてをわかっているかのように行動する。

重要語句
トライエッジ
三爪痕の意。志乃をプレイヤーキルし、ハセヲをデータドレインしたとされている。

データドレイン
プログラムの改竄をする技。（ハセヲたちの世界はゲーム、そしてリアル。二つの世界がある）

ジョブエクステンド

マルチウェポンのハセヲのランクアップイベント。ランクが上がる
と使える武器が増える。初期化されたハセヲは、1stフォーム。
(3rdフォームまである)

マルチウェポン

平たく言うならば万能型。慣れるのが難しい。

何か聞きたいときにはメッセージか評価で書いてくれたらうれしい
です。書き加えます。

アバター

碑文使いと呼ばれる特殊なプレイヤーのみが使えるもう一つの自分。
詳細は不明。

第0話 プロローグ（前書き）

ファンフィクションです。
かでてきません。

まだハセヲし

第0話 プロローグ

くそ…俺は…負けたのか？

トライエッジのあの技はなんだったんだ？

俺がやってきたこの半年間はなんだったんだ？

くそ！くそ！くそ！俺には、何もできないのか？！

オーヴァン

「強くなれ」と言われて、俺は強くなった。それでもダメだったんだぜ……俺はどうすればいいんだ？

志乃……

俺の意識は遠退いていく。

世界は回っていく感覚がした。

ここは何処だ？森の草木の匂い。夢か？いや、腕に痛みがある。

まてよ。匂い？痛み？ここはリアルなのか？

ハセヲは起き上がりまわりを見渡した。森がただ視界いっぱいに広がっている。自分の服装はハセヲのままだった。

「リアルじゃない」

そして気付いた。

「お、俺。１stフォームになっちまってる。なんで……」

そこで気付いた。トライエッジの所為だと。

「トライエッジ……！！」

ハセヲは眉間にしわを寄せると憎々しげに言った。歩きだすとすぐに視界がひらけた。すると目に映ったのは自分の世界ではない世界だった。

ハセヲは近くの村が見えた方へと歩きだした。

「ここは俺の世界じゃねえ」

村に行くともまるで活気がなく、ゴーストタウンのようだった。奥に行くとなんかおじさんに会った。

「あの、ここなんかあったのか？」

男は驚くように振り向くと俺の姿をみて安心するといった。

「さっきここをディザイアンが通っていったんだよ」俺は首を傾げていった。

「ディザイアン？」

男は驚いたように言った。

「ディザイアンを知らないのかい？ここは不可侵契約してるから大丈夫だが、シルヴァラントのあちこちでのさばっている組織さ」

男は憎らしく吐き捨てた。また男がこちらを向くと

「しかも、神託が下った今日に聖堂に行きました。神子様が心配です」

また俺は訝しげに聞いた。

「神託？神子？」

「本当に何も知らないのですね」

ハセヲは男にマールテル教について教えてもらった。大まかに言

えば、封印を解き、救いの塔というものに行けばいい。ということらしい。ただ成功した神子はいないらしい。

男はそう言くとそそくさと立ち去った。

ハセヲは男の話から自分が帰ることができる方法があるのではないかと考えていた。

いや、他に方法が考えられなかったのだ。

やや考えたあと、聖堂に向かって歩きだした。

そこには出会いが待っている。それは偶然のような必然。ハセヲは帰ることだけを考え、聖堂に向かって歩く。

第一話 神託（前書き）

ぐだぐだです

第一話 神託

聖堂と呼ばれている場所は容易に見つけることができた。聖堂からは光が立ち上っている。俺が考えていた聖堂はグリーンマレーヴであつたが想像とかけ離れていた。

しかも、そこから戦闘音が聞こえてくる。

階段を駆け上がる。

とそこには自分と同じ年齢くらいの子供が戦っていた。赤服の双剣士、白服のチャクラム使い、青服の魔法使い。相手はハンマーを振り回す大男。

彼らの攻撃はまるで効いていないかのようだった。双剣士は大男の攻撃を避けきれず、パンチをくらった。バランスを崩した双剣士に大男はハンマーを振り下ろす。チャクラム使いと魔法使いは間に合わず叫んだ。ハセヲはその前に走りだしていた。

双剣士は次にくる痛みにかまえた。

鈍い音がした。

双剣士が目を見開くとそこには一人の男がいた。その男は双剣の片方でハンマーを止めていた。するとその双剣士は男に蹴を入れた。大男は二メートル程吹き飛んだ。

赤服の双剣士、白服のチャクラム使い、青服の魔法使いは茫然としていた。

だが一番驚いたのはハセヲだった。自分が強くなっているのに気付いた。元の世界より動きが軽く感じた。だがまだレベル不足なのか動きにキレがなかった。しかもこの双剣は初心者武器である。まるでかっこつかない。

大男は立ち上がり、鉄球を投げてきた。避けたが腕に鎖が巻き付く、大男はニヤリと笑った。しかしハセヲは冷静に立っていた。大男はひっぱるが動かない。ハセヲが今度はニヤリと笑うとひっぱるうと鎖に手を掛けたその時、横を何かが駆け抜けると大男を切り裂

いた。鉄球から力が抜けるとハセヲは手を鎖から外した。

一番小さな青服の魔法使い少年はびっくりしたように言った。

「この人たちすごく強いよ」

ハセヲは大男を切り裂いた男を見た。明らかに戦い慣れた動きだった。しかも彼を見るとデザイナーンとおもわれる男たちのリーダーが

「まさかおまえが来るとはな」と言い、走り去った。

そう考えていると、影からお婆さんがでてきた。それを見ると白服の女の子が言った。

「ファイドラお婆さま」

「コレットよ。神託を」

「はい」

と言うとお婆さんは男に向かっていった。

「護衛につくはずだった神官が全員殺されてしまったのじゃがすみませぬが護衛についてもらえませぬか？」

男は冷静に言った。

「私はクラトス・アウリオン、傭兵だ。金さえ積んでもらえばかまわん」

「背に腹はかえられるまい。お願いしますぞ」

「承知した」

そう言うとお婆さんの後ろについた。

「おぬしにも頼みたいのじゃが？」

「俺は金はいらない」

「じゃが…」

「必要ない」

ハセヲはそう言つて、クラトスの横に立った。すると赤服の少年がお婆さんに言った。

「俺、俺も行く！」

「子供の遠足ではないのだがな」

クラトスが言った。赤服の少年は怒った。

「なんだと！」

「やめて！ロイド！」

と間に入って神子が止める。だがクラトスはロイドを見、手に付いた玉を見た。そして口を開いた。

「お前はロイドと言うのか？」

「そ、そうだよ」

ロイドは今だにクラトスを睨んでいる。クラトスは納得したようにロイドを見た。神子はクラトスに言った。

「私からもお願いします。一緒に行かせてください」 クラトスはため息を漏らすと

「神子の意見を尊重しよう」

と言った。

「よっしゃ！ありがとなコレット」

ガッツポーズをしたロイドはコレットに笑った。

「私もみんなといけたら心強いもん」

はにかんだような笑顔で答えた。

「よし！いくぞ！ジーニアス！」

「えゝゝ！僕も行くのゝ！」

腰が引き気味のジーニアスをロイドは掴むと引つ張りながら聖堂に入ってしまった。悲鳴は聞かなかったことにしよう。

ハセヲの横でクラトスはため息を漏らした。

「なあ」

「ああ？」

ロイドがハセヲに言々と喧嘩腰に答えた。

ロイドは気にする素振りもなく聞いた。

「あんた名前はなんていうんだ？」

楽しげに見る姿が志乃と重なった。俺は言い淀んだが答えた。

「ハセヲだ」

「よろしくな！ハセヲ！」

「ああ…」

屈託のない言葉に俺は驚きながら返事をした。
するとジーニアスにコレットが近づいてきた。

「僕、ジーニアスよろしく！ハセヲ！」

「私、コレットよろしくねハセヲ！」

三人はハセヲを囲むように歩いている。ハセヲはこの頃あまり人
としゃべっていないかったためこの自体に対処できない。

内心焦っている俺にクラトスが言った。

「着いたぞ。神子、神託を」

コレットがひざまずき。祈りを捧げると祭壇が光りだした。祭壇
の上に天使があらわれた。俺が最初に天使をみて思ったことは（胡
散臭い）だった。

天使は何かを言っていたが聞き流した。もともと宗教に関心のな
い俺は外にあらわれた塔を見た。

「あれが救いの塔か」

雲を突き抜けて立つ塔。俺はあの塔に帰る方法があるような気が
した。

「おい、ハセヲー」

「ん、なんだ？」

ジーニアスが俺を見上げていた。俺はそんなジーニアスの頭に手
を乗せてかき回した。ジーニアスはわーわー言いながらされるがま
まとなっている。そこで俺は気付いた。

「終わったのか」

「ちょっとハセラー！放してよ！」

「ワリ」

手を外すとワイプホールに入った。

後ろから追い掛けてくるロイドとジーニアスを見ずに聖堂を出た。

俺のやることはわかった。あの塔に行く。俺の世界に早く戻る。

——志乃逢いたいよ——

第二話 孤独の旅（前書き）

原作ぞいで行きますが最初はハセヲの性格上、別行動です。

あとで神子たち一行達とは合流します。たぶん

では、第一章

シルヴァラント編

スタート

第二話 孤独の旅

「ねえ、ハセヲ」

「なんだ」

「ハセヲって何でここにきたの？」

「ジーニアスはイセリアで追い付き、聞いた。俺は少し考え
「神託が見たかったからだ」

と言った。

ジーニアスは

「ふーん」と言った。人に疑われるのは慣れてる。

「あれがコレットの家だぜ」

そう言うのとロイドとジーニアスはやや大きめの家を差した。

俺たちがその家に入ると話し合いがされていた。あの男が言っていた救済の旅だろう。入ると最初に感じたのはクラトスの視線だった。たがすぐに逸らした。イラっときたが椅子に座った。すると婆さんに代わって男がこつちを向くと感謝の言葉を言った。

「今日の護衛はありがとうございました。その腕を見込んでなので
すが神子の旅の護衛も受けてくださいませんか？」

言葉の真摯さにこの男が神子の父だということが分かった。それを聞いた小太りの男が俺を指差し、婆さんに怒った。

「ふん！このような子供が世界を背負う神子の護衛だと！馬鹿なこ
とを！ままごとではないの……！」

俺は表情一つ変えず、双剣を小太りの男の喉元に突き付けた。

「うるせえ」

と俺は言い喉元から双剣を離した。小太りの男は嫌な汗を拭いながら座り直した。

俺は口を開いた。

「俺は護衛にはつかない。俺に神子は…」
コレットを見る。

「関係ない」

全員は何も言わなかった。俺はロイドとジーニアスを置いて家を出た。

イセリアを歩いていると声をかけられた。振り返ると銀髪の二十歳すぎくらいの女。

「あなたがハセヲね」

「なんだよ。オバサン」

「オ、オバ…聞いたとおりの性格ね」

「そりやどうも。で、なんなんだ？用件があるんだろ」

額に青筋を出しながら笑顔で答えた。

「私の名前はリフィル・セージよ。ジーニアスの姉でまだお姉さんよ」

ハセヲは嘲笑うように鼻を鳴らし言った。

「で？オバサン。何？」

「もういいわ。それであなたに聞きたいことがあるのよ」

リフィルは真剣な顔をした。

「貴方は何者なの？」

「ただの旅人だ」

「違うわね。貴方のマナの流れは異常なのよ。世界中の人を見てきたけど貴方のような人は初めてよ」

俺は歩きだすと振り向かず言った。

「マナって奴はよくわかんねえが俺はあんたが思ってる化け物かもな」

リフィルは追い掛けてこなかった。

「こいつでいいかい？」

「ああ」

差し出されたアイテムと地図を受け取り、モンスターを倒して手に入れた金をだした。

「お買い上げありがとうございますー」

「……………」

俺はまず地図を見た。本来の世界の地図と全然違ったおかげで覚えるのに時間が掛かった。

まず一番近いトリエツト。いきなり砂漠かよ。とため息を漏らすとイセリアを出ていった。

第三話 めんどくさい奴ら（前書き）

ハセヲ中心の話です。 シンフォニアのみなさんはでてきませ
ん。 もう少し待ってください。

あしからず

第三話 めんどくさい奴ら

「あちい」

晴天の砂漠は予測をはるかに上回り熱かった。考えたのはここで死んだらリアルでも死ぬのかだった。

しばらく歩くと見るからに賊と荷物を担いだ女がいた。つい昔のくせで賊に近づいていった。

「おい女！その荷物よこせ！」

「じゃねえと殺しちまうぜー？」

「でも、これにはトリエツトの人たちの食料が…」

「いいからよこせって！」　そう言う賊の男は女の荷物を奪った。ボスらしい男に見せる。ボスらしい男は気持ち悪く笑うと去っていった。こつとした。

「お願いします！それは大事なものです！返してください！」
ボスらしい男に女がすがりつく男はうつとうしげに女をぶつた。女は俯せに倒れた。それを見て賊は笑いながら去ろうとし、気付いた。ハセヲの存在に。

下っぱだろ男がハセヲに寄ってくるとひびつてと思ったのか、猫なで声をだした。はずだった。

「ナンダイば……」

血が舞った。

「こいつ…」

呆然とした後、すぐ武器を構えようとしたが…

「おせえ！」

ハセヲは疾走し賊を二人吹き飛ばす、と近くの賊を四人いつぺんに切り裂いた。返り血で体が赤く血塗られる。女とボスらしい男は呆然としたままだった。残りも二人だけ。ハセヲの姿は、まるで死神のようだった。

「うわぁー！ー！ー！」 男は逃げ出した。が

「どこに行く気だ？」

ハセヲは前に立った。男は目を見開く。ハセヲが二閃すると男は倒れた。

女はハセヲを見て怯えていた。ハセヲは女の方へ歩いていく。女は身構えたがハセヲは横を通り過ぎていった。

くそ。あいつを思い出しちゃったじゃねえか。

無駄なことしちゃった。早く次の町についてシャワー浴びてえ。

トリエツトへまた歩きだし…

「おい。何やってんだ？」 腰にしがみついた女に言った。女は泣き目で言った。

「腰が抜けちゃいました」

「はぁ！？」

「トリエツトまで連れてってください」

「何でそんなめんどくさいことを……」

「お願いします！」

俺の考えは間違ってたようだ。こいつはアトリに似ている。頑固な所があるあいつに。

「あつあれですっ！きゃあ！」
それを聞くと、この女を担いだまま走りだした。

トリエツトに入ると一人の男が寄ってきた。

「おいトリア！」

「お父さん！」

「お父さん！？」

俺は女と男を見比べた。女は華奢で年下にしか見えず、男は大柄で筋肉質だが表情は優しい。驚き気味のハセヲの背中に手を回しトリアを背中に抱えた。

「すまんかったな！トリアは重かったろーに！ガハハハハハ！」

「お、お父さん！」

「ふあふあ、ふまん。ふまん」

トリアは髭をひっぱり離れた。

「で、坊主、名前はなんてんだ？」

「あ、ああ。ハセヲだ」

さつきからペースを乱されているハセヲはただ答えることしかできない。

男はにっこり笑うと

「俺の名前はバーグってんだ。トリアが世話になったな」

「私はトリアです」

と自己紹介された。

にっこり笑う二人に俺は

「宿は何処だ」
と言った。

「はい、この部屋です」

「おい。俺は宿でいいつつたろが！なんでおまえらの家に泊まらねえといけねえんだ！」

「お父さんがお礼をしたいといっていたので」

「あのオヤジ」

「お風呂はここを真つすぐ行ってつきあたりを右です。では、ごゆつくり」

そう言つと家から出て行つた。

「なんなんだ？あいつら」

外は暗くなっている。

風呂からあがつた俺は服を着ながらキッチンに向かう。

するとトリアが微笑んで飯をだした。オヤジはスプーン片手に座っている。まさにこれが楽しみという感じで待っている。子供かよ。オヤジはこっちが気付いた。

「こつちだ。こつちだー」　そう言つと向かいの席を指した。俺が座ると目の前に飯がだされた。

「お口に合うかわかりませんがどうぞ」

シチューだった。おいしそうだ。オヤジはガツガツ食っている。

トリアは俺が食べるのを心待ちにしている。俺はそのプレッシャーに負け、一口食べた。それは見たとおり

「おいしいな……」

そう言つとトリアは微笑んで隣に座り食べだした。　久しぶりだった。手作りの飯を食つたのは。いつも冷凍食品ばかり食べていた俺には、それが無性においしかった。

「で、坊主、お前何してるか？」

「何かつてなんだよ？」

「仕事だ。仕事。何かやってるのか？」

俺は少し考え、言つた。

「なんもやつとねえよ。旅人だからな」

オヤジはそれを聞くと、にっこり笑い

「ここで働かねえか？」

と言つた。俺は呆然とした。俺には帰らなければならない所がある。

「娘も氣に入つたみてえだし、どうだ。坊主」

トリアは顔真っ赤にして聞いている。だが俺は帰らなければならない。だから

「悪い。俺は帰らなければならない場所があるんだ」　オヤジは目をやさしく細め言つた。

「坊主、何か重いもんかついでやがるな」

「……………」

無言を肯定と、とったのだろう。

「いい覚悟持つてやがる。さすが俺が認めた坊主だ！ガハハハハハ
！」

俺は酒の晩酌に付き合わされた。

「じゃあ俺は行くぜ」

「おう！たまには顔見せにこいよ！」

トリエットの入り口で爆笑しているオヤジ。後ろからトリアが出てきた。

「あのこれどうぞ」

何かを包まれている袋をもらった。開く。

「これは…」

双剣だった。

「お父さんが作ったものです」

オヤジを見た。侮れない奴だ。

刀身は刀のようで黒が主体だった。

「大事に使えよ！坊主」　オヤジは大声で俺に言った。トリアは笑いながら俺に手を振った。俺は走りだした。そして、振り返り

「ああ！」

と言った。

トリエツトが見えなくなると、走るのをやめる。そして、あいつらを思い出した。しかし、すぐにかぶりを振り、歩きだした。

その時、メールの音がした。俺は確認するように聞く。

『オサ山道の坑道に行け』　なんだこれは、俺の行動が知られてる。

「差出人は……オーヴァン！！！！」

なぜ！あいつが！

俺は走りだした。

——俺はあんたを——

——ゆるさねえ——

第四話 もう一人の自分（前書き）

アバターの片鱗を出しました。やっとおちあいます。

暗殺者との戦いです。

戦うつもりはなかったの

にハセヲはまったくという感じです。

どうぞ

第四話 もう一人の自分

「はあ、はあ、はあ、やつとついた」

砂漠を抜け、オサ山道に着いている。だか、さすがに疲れ地べたに座り込んだ。

「はあ、はあ、はあ、はあーあ」

俺は寝転がった。

オーヴァン。あんたは何がしたいんだ？ 訳わかんねえよ。

（ゾクッ）

考えているときに殺気を感じた。

「誰だ！」

近くにあつた石を投げるすると

「力キン」と甲高い金属音が響き、煙がたちこめた。

「まさか、気付かれるとはね」

煙が晴れるとそこには女があらわれた。

俺は双剣を構え女の方へ駆ける。右の剣を振るが、女は札で受けとめた。驚く俺の脇腹に札を貼られる。

「炸力符！」

女の言葉に反応したように札が爆発した。強烈な衝撃が脇腹を襲う。初めて感じる死への痛みだった。

女から離れると唾を吐いた。虚しくも血が交ざっている。女はあわてていた。予想していなかったようだ。

「あんたの所為だよ！ 反射的に『炸力符』使っちゃったじゃないか！」

「うるせえよ」

また血を横に吐き捨てると剣を構える。

「止めときなつて」

「舐めんなよ！」

走りだす。

「散力符」

手の双剣が吹き飛ぶ、札が飛んできたのは見えたが反応することができない。

「悪いね。武器を封じさせてもらったよ」

女は構えを解き、腕を組んでみている。俺が後ろを向くと札の付いた剣が地面に刺さっている。

負けた。負けた？こんな女に俺は負けたのか？

——強くなれ。ハセヲ——

俺は弱い。トライエツジにも女にも勝てない。勝てる力がほしい！ほしい！ほしい！ほしい！ほしい！ほしい！ほしい！ほしい！

《ホシイカ？チカラガ》――

ほしい

《ナラ、ネムリナ》

なんだ…眠くな…る

《ククククク、マタナ、オレ》

「ねえ、あんたどうしたのさ。さっきから黙っちゃまって」

女が近づいてくるとハセヲが顔を上げた。

「なんだい大丈夫なんじゃないかい」

女はほっとしたようにハセヲの顔を見る。

ハセヲの顔に紋様が表れた。

暗い

何処なんだ　ここは

光がスポットライトのように降り注ぐ。もう一つ降り注いでいる場所がある。

お前は誰だ

白い姿が光りよく見えない。

オレガワカンネエノカ？

どういう意味だ

オレハ…

近づいてくる。姿が鮮明にわかってくる。

お前は…

正面に立った。

オマエダ

俺

オレハ オマエダガ オマエデハナイ オマエノ ナカデ ネム
ルモノ

訳わかんねえよ！俺のなかの俺！？なんなんだよ！お前は！

オマエハ フカンゼンダ

俺が不完全だと！

オマエハ マダ チカラヲ エテイナイ ミツケテイナイ

力、か

イママデ オマエガ ギセイニ シテキタ ステタ ミチヲ サ
ガシテミロ

探すそしたら俺は強くなれるのか？

オマエガ ドンナツヨサヲ ミツケルカハ ワカラナイガ ミツ
ケラレナカタラ ソコマデダッタト アキラメナ

俺は志乃を取り戻すまであきらめねえ！絶対にだ！

ソレデコソ オレノ シュジンダ コノカラダハ カエス

視界が光り輝き白く埋め尽くされていった。

ハセヲが立ち上がると女は身構えた。

ハセヲが飛び出して行くそれは無謀に見えた。女は札を出してハセヲに投げる。

「あんたもしつこいね！『散力符』！」

言葉に反応し、札が数多の流星となって降り注ぐ。しかし、ハセヲはすべて避けた。女はありえないという風に手で口を覆う。

「そんな馬鹿な！」

その間にもハセヲの紋様ははっきりしていく。それは全身に発現し、恐怖を抱かずには、いられなかった。ハセヲはニヤリと笑い、女に近づいてくる。女は懷から赤い札を出した。

「お爺ちゃん使うよ。式神」

そう言い、隣に赤い式神を召喚した。

「こいつにはちょっとやそつとじゃ勝てないよ」

女が不適に言々とハセヲ指差す。ハセヲは片手を上にかかげた。

「行きな！紅 ドガー——ン！！！！」

凄まじい轟音が鳴り響いた。

女が横を見ると式神がいなくなっていた。式神がいたらしい場所の後ろにあった崖が大きく削れ、地面には巨大な手型が付いていた。明らかにハセヲの行いだった。

圧倒的なまでの力の差に女は震えている。そんな女にハセヲは近づいて行く。ハセヲは女の前に立つと首を掴み高く持ち上げる。

「消えちまえ」

ハセヲはつぶやくと腕に力を入れようとした。

だが、逆に離れた。

ハセヲは頭を抱えながら数歩下がる。女はよろめきながらハセヲを見る。ハセヲは空に向かい

「ウオオオーーーーー」

叫んだ。

「なんだなんだ！さっきの声！こっちから聞こえたぜ」

「ちよつとまってよ！ロイド！」

「落ち着きなさいロイド」

「だってよ。先生」

そこへ訪れたのは神子の一行であつた。

「む、注意しろ」

クラトスはそう言う剣を構えた。女は言う。

「あんたらの中に神子はいるか？」

するとコレットが手を上げた。

「あつ私です」

女は目の色をかえた。札を構えるとコレットに突進しようとした。

「御命頂戴！」

「待て、俺との戦いが終わってない」

足を掴んでいるのが俺だと気付いたロイドたちが叫んだ。

「ハセヲ！」

「えっ？ハセヲ！」

「先生回復を！」

近寄ってくる。

女は構えを解くと反対を向いた。それを見たクラトスは意外そうに言った。

「襲つてこないのか？」

「あんな化け物なんかと戦うなんてごめんだね」

そう言い残すと走って去って行った。

クラトスはハセヲを見て女の言葉を思い出していた

「化け物」

「待つてろよ。すぐ良くなるからな」
「『ナース』」

俺はゆっくり眠りに落ちていった。

第五話

ジョブ

エクステンド（前書き）

どこが悪いか指摘してください。上達しますし。
分かります。分かりにくいかもしれません。
んが どうぞ

第五話 ジョブ

エクステンド

頭が冷たい。

ぼやけた景色が見えた。横にたたずむ女性が心配そうに見ている。

「志乃？」

「シノ…さんですか？」

「！…わりい、間違った」 コレットと志乃を間違ったようだ。

「私、先生呼んできます」 と言うと走って行った。 やつと意識が覚醒してきた。 まわりを見渡す。

まだオサ山道か。

昨日の名残を見る。 崖の亀裂がひどくなっていた。 うっすらと自分がやったことを覚えている。 あれが俺の力。 予想していたものより強大な力。 拳を握る。 口元がゆるむ。 あの手があれば、トライエツジにも勝てる。

ロイドたちが来ると俺はその笑みを隠した。

「大丈夫のようね。 それにしても凄い回復力ね」

「まさかハセヲが負けるなんてな。 あいつ、そんなに強かったのか？」

「まあな」

ロイドの問いに目を合わさず答えた。 するとジーニアスがあきれ気味に言う。

「ロイド、暗殺者なんだから強いに決まってるじゃないか。 バツカだな」

「うるせえ」

「やめなさい二人とも」

リフィルがたしなめる。

「でも良かった。ハセヲが無事で」

「ああ、本当に良かったな」

コレットの安堵にロイドも同意する。俺は驚く。

こいつらは俺のことを心から心配している。

本当になんなんだこいつらは、一回会ったくらいの俺をどうして心配できるんだ。訳わかんねえよ。

俺が考えているとクラトスが言った。

「お前は本当に負けたのか？」

クラトスは真意をはかる目をしていた。俺はばつが悪そうに

「ああ」

と言うとクラトスはそれ以上追求して

こなかった。

少し休み俺は立ち上がる。オサ坑道を探さなければいけない。

「そろそろ行くぞ」

クラトスはロイドたちに言うと言っていく。

「行こうぜ！ハセヲ」

ロイドは俺の腕を引っ張っていく。やや駆け足でクラトスを追い掛けた。

そんなに挙動不振だったとは思えないがジーニアスが聞いてきた。

「どうしたのハセヲ？何か探してるの？」

「いや、用があるのは、オサ山道の坑道だ。その入り口を探してるだよ」

いちいち隠すの面倒だったから隠さず答えた。ジーニアスは興味があるらしく、一緒に探している。ロイドたちも混ざり結局全員で探し始めた。

オサ山道も終盤に差し掛かった時、ついに坑道を見つけた。

坑道内は所々に明かりが点いていたが暗い。リフィルとクラトスからは疑惑の目を向けられている。かまわず俺は進んでいった。

坑道の最深部に着くと、そこには巨大な骸骨があったただけだった。コレットが触ると骸骨が動きだした。

「ワレ強キ者ト戦ウ」

腕が六本あり腕、一つ一つに剣を持っていると言う異形な姿である。

腕を振るい地面に叩きつける。すぐさま俺はバック転して避ける。クラトスと俺とロイドが切り込み、ジーニアスにリフィル、コレットは詠唱を始める。

予想以上に強かった。

三人で切り込むと吹き飛ばされる。物理攻撃は止めると魔法による攻撃に切り替えた。光が弱点だとリフィルが言っていると俺はレイザス、コレットはエンジェルフェザー、リフィルはフォトンを唱えた。

長い時間をかけ、ついに骸骨を倒すことができた。骸骨は不吉なことを言っていると消えていった。

「ワレマタ現ル強キ者ヨ」 骸骨が消えると辺りが光り輝きハセヲを巻き込んでいく。だがこの感覚に覚えがあった。

「ジョブエクステンド」

服装が変化し顔のマークも変化した。光が消え、ハセヲは地面に降り立つと上から大剣が下りてくる。その大剣の名を俺は知っていた。

「大百足」

一振りし背中に消した。俺はロイドたちを見るとロイド、コレット、ジーニアスは目を輝かせ、対照的にリフィルとクラトスは困惑していた。

俺はそろそろ本当のことを言おうと考えていた。

「要するにあなたは別の世界から来て、帰り方を探しているというわけね」

「そうだったつっても、信じてもらえるかはわかんねえけどな」

「いいえ、信じるわ。そうと考えれば、つじつまがあうのよ……フフ異世界か、じゅる」

「ね、姉さん！」

今嫌な音を聞いたような気がしたが聞き流すことにした。

「にしてもスゲーよな！異世界なんて！」

「本当だよ。どんなところなの？」

それから夜遅くまで質問攻めにあつたのは言うまでもない。

その中で唯一クラトスは腕を組み、思案顔でこちらを見ていた。

もう心は決まっていたのかもしれない。

仲間を作らなかつたのはもう何も失いたくなかつたからかもしれない。何もなければ失わずにすんだ。

志乃の時のような思いはもうしたくなかつた。嫌だつた。大切なものをなくすのは。でも、こいつらと過ごした時間の心地よさは嘘じゃない。

今はそう思えるんだ。

第六話 決断と修行（前書き）

難しいですよ

では

ハセヲを強くする段取りです。

どうぞ

第六話 決断と修行

否応なく光る星の下で俺は横で寝ているジーニアスを起こさないように起き上がった。

「行くのか？」

今だに眠っていなかったクラトスが聞くと、俺は

「あんたらは、何処行くんだ？」

聞き返していた。

「パルマコスタに行くことになるだろう」

とクラトスは東を見ながら答える。

「俺はハイマに行く」

俺はどんな顔で言っただろな。

「神子たちは、お前と行こうとしていたが？」

「俺は人に頼るのも、頼られるのもごめんだ」

と皮肉って返すと北西へ歩き始めた。少し進み俺は振り向き

「あいつらにはうまく言っといてくれ」

なぜか知らねえけど、あいつらとはまた会いそうな気がする。

クラトスは

「私は保護者ではないのだがな」

と呟いた。

ロイドたちと別れ、一週間、俺はハイマを拠点にレベル上げに励んでいた。

レベルは40を越え、今や近くのモンスターは一撃で倒せるようになった。さすがに 死の恐怖 の時に比べると技の威力も動きのキレも劣るが、前のコントロールとは違い、自かに自分が動くことでそれはカバーできた。

『虎乱襲』

一斉に襲い掛かってきた蜂型モンスターを大百足で一掃。大百足の刃をチェンソーの様に回転させ、イモ虫型モンスターを両断する。逃げようと飛んでいく、蜂にはレイザスを放ち焼き払った。

オークには双剣に、かえモンスターが振り下ろす拳を避け、後ろに周り込み切り裂く。数回切り裂いた後双刃乱絶を発動し、バラバラにした。

今日俺はルインに食料調達に行く予定だ。この一週間の間に三回程行ったが、活気溢れた町で住人はありえない程親切だったことを覚えている。

出てきた狼を蹴り上げ、一緒に出てきた鷹にぶつけた。そして二匹を切り裂く。双剣を消し、ルインの門を開いた。

食料調達を終え、帰ろうとすると聞き覚えのある声が聞こえた。
「ほら逃げな！1、2、3、4……」

子供が散り散りに逃げていく。それを横目にそいつに近づいて声をかけた。

「ガキと遊んでやってんのか？意外だな」

「！あんたは……」

驚いたそいつは先日暗殺者だった。

「あんたじゃねえハセヲだ」

「ハセヲ？変な名前だね」

「匿名希望の暗殺者に言われたかねえよ」

女は誇らしげに胸を張ると

「あたしは‘しいな’ってんだ。わかったかい？名前に暗殺者なんて呼ぶんじゃないよ！」

「お前だつて俺に言えるほど、普通じゃねえじゃねえか」

「う、うるさいね」

顔を真っ赤にして怒る。ハセヲはいつものぶっきやう面より、やや頬を緩ませている。しいなが何か口に出そうとした時、子供たちが近寄ってきた。

「お姉ちゃんまだー？」

「じゃあな。俺は帰るぜ。ガキども待ってんだろ？」

「あ、ああ、そうさせてもらうよ」

意外そうにしいなはハセヲを見たがハセヲはルインを出ていった。ハセヲの心に憎しみは無かった。

明くる日の朝。愕然とすることとなる。

それは夢のような悪夢だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7441b/>

.hack//シンフォニア

2010年10月10日08時03分発行